

文化をとりあげることで教育や職業としての労働の位置づけが弱くなっていることの4点を指摘する。

そして終章では、それぞれの再生産論について残された課題と再生産論の展望について述べられている。課題としては、初発のスタティックで明快な再生産の論理と変動論的視点が必ずしも整合していない点、変動論的な視点が歴史的な視点と必ずしも結びついていない点、グラントセオリー化にともない抽象化している点、という3点が指摘される。そして、今後の再生産論の発展にとって必要な視点として、再生産様式の史的段階論的な把握、再生産様式の枠組みとしての社会構造の把握、機構的システムと労働—生活世界に対応した階級・階層構造の把握、内部に矛盾を抱える再生産様式が古い段階から新しい段階へ移行するメカニズムの把握の4点が挙げられている。

評者の観点から言えば、M. アップル

■ 書 評 ■

門脇厚司・宮台真司 編

『「異界」を生きる少年少女』

東京学芸大学 松本良夫

本書は、本学会の研究部が企画した課題研究（'90-'91年度）の成果を核にして編纂された労作である。このことは、研究活動のあり方として正当なことであり、関係者に敬意を表したい。

まず、本書の構成を紹介しておく。本書は、編者の一人門脇氏の序章「社会化異変の諸相」と、2部延べ10章から成る。

の階級・性・人種にわたる非同時平行的な再生産論やギロー（ジルーという表記も可）の抵抗論などの理論的な試みを、社会変革に向けた「期待の論理」としてしりぞけるのではなく、彼らが4つの再生産論に対してどのような批判をしているのかも検討してほしかった。また、史的段階論的把握と関連して、再生産と国家との関係が、機構的システムとの絡みで萌芽的に研究課題として挙げられていることで、今後の研究が期待できよう。本書は原著者の著書や論文、内外の先行研究のフォローもよくなされ、巻末の文献目録も充実しており、まさに日本における再生産論研究の一里塚に値する作品になっている。私たちには、この作品を乗り越えて、再生産論のさらなる批判的検証と発展が待たれているのである。

◆A5判 292頁 3,296円

東信堂

第1部「子ども異変の現場から」は、家族（石川洋明）、学校（諏訪哲二）、都市／祝祭空間（清永賢二）、消費社会／キッズ・マーケット（富田英典）、ブルセラ女子高生—親子（宮台真司）の各現場でとらえた「異変」の報告にあてられている。

第2部「＜異界＞を読み解く視座」は、「現代」（メディア社会／ポストモダン

～)における「子ども論」(山村賢明, 藤村正之, 石戸教嗣)「教育／社会化論」(加藤隆雄, 岩見和彦)の再検討にあてられている。

序章は、従来の「子ども・若者変容」論の不充分さ(生活環境・様式の大変化にともなう社会化過程の重大<異変>の認識欠如)を批判し、「異界」探索の必要性を強調している。本書は、執筆者各人各様の「異界」探索記であり、その報告である。編者もことわっているが、各人の視角の違いが興味深い。

第1部では、「異界」を構成している諸成分が分析されている。①家族—における個人<責任>の不在, ②学校—子ども側からの「脱構築」と「教育」原基の揺らぎ, ③都市—少年世界における現実対峙の精神の衰え, ④消費社会—「子ども市場」に踊らされる親子(ナルシスティックな少年少女・キッチュな親子関係), ⑤ブルセラ女子高生の親子関係—に見る「団塊親の幻想性」(過剰に幻想的な親と過剰に現実的な子の断絶・なれ合い関係)—これらが「異界」シーンを形成しているという。荒っぽい要約だが、はじめの5章を一つの絵にしてみると、こうなる。

第1部が現象編だとしたら、第2部は理論編である。各章の主旨をあえて1～2行で表現すれば、⑥メディア社会の子ども状況に応じた「子ども」論の必要性(既成の子ども観／子ども＝社会化対象観からの脱却。子どもの生活世界への生活者としての参入・理解)／⑦メディア空間における少年たちのリアリティー変容の認識の必要性／⑧「教育システム」

と「子ども」の関係性の再考の必要性／⑨ポストモダンにおける「社会化観」(概念・研究法)の脱構築の必要性／⑩文化変容「急激時代」における社会化空間の特異性(文化伝達経路の多様化)の認識の必要性—ということになるだろうか。

本書は、どの章にも「なぜ子どもは見えないか」といったソフトな副題がつけられ、読者の「異界見たさ」を誘うように構成されているが、教育社会学の論客が緻密な論議を展開しているため、論旨を追うだけでも相当の忍耐力を要する。

本書は、実に多彩な顔をもっている。そのこと自体、本書の一つの特徴であり、現代社会と学界の状況を象徴している。本書は表向きは「子ども・若者」論であるが、その内実は「現代文明論」といえよう。そのテーマは、「少年・少女が示してくれた現代社会の<異界>性」ということになる。ただ、本書を読んで、「異界」性の正体が「見えた!」かという、もう一つハッキリしない。そこが「異界」の異界たるゆえんであり、このテーマの難しさであろう。論者によって「異界」のとらえ方に相違がある。ある論者は社会の大状況に、別の論者は少年世界に「異界」を見ており、その評価も否定的／中性的／肯定的さまざまである。欲をいえば、このキーワードをめぐるもっと論議を深めてほしかった。

ところで、個人的なことだが評者は本年4月から附属高校の校長を併任している。そのため、特別な期待をもって本書を読ませていただいた。それは、本書の論議が「教育現場」に対していかなる示唆をあたえてくれるのか—という期待で